

## 【学会レビュー】

## 日本ギaskell協会第23回大会

(江戸川大学, 2011年10月2日)

松村 豊子

2011年10月2日(日)午前10時から午後8時過ぎまで、本学A棟8Fにある第一、第二、第三会議室において日本ギaskell協会第23回大会が開催された。市村佑一学長の開催校挨拶をはじめ大学側の惜しみないご支援ご協力を賜り、研究発表、総会、シンポジウム、講演、そして、大会後の懇親会というタイトなスケジュールを滞りなく好評のうちに終えることができたことにまず感謝申し上げたい。そして、デジタル化に対抗する出版社の熱意と誠意にも敬意を表したい。実践女子大学で開催された前大会ではギaskell生誕200年ということで19世紀イギリスの女性ファッション及びギaskellの著作物を展示し、参加者を募ったが、今回は19世紀イギリス文化に関する研究書を数多く出版している出版社が3社参加した。研究と教育の場、また、文字文化と印刷・出版産業が切り離せない関係にあることを痛感した大会だった。

日本ギaskell協会は、二十数年前にマンチェスター(イギリス)に本部をおくギaskell協会(The Gaskell Society)の日本支部として発足して以来、年1回機関誌を発行する学術研究団体である。産業革命直後の19世紀中葉のイギリスにおいて小説家として格差社会の労働問題等々の諸問題に積極的に取り組んだエリザベス・ギaskell(Elizabeth Cleghorn Gaskell, 1810-65)の知名度は日本では決して高くないが、イギリス本国では産業革命後の社会的な大混乱のなかで秩序と平和を唱えた独創的な女性作家として当時も今も有名である。ギaskell協会日本支部の学際的な研究活動は近年非常に活発で、日本支部の理事

2名が本国の協会の理事をも兼任し、英文投稿論文が本国協会の機関誌(*The Gaskell Society Journal*)に毎年1本は採用されるほど国際的評価は高い。また、研究熱心な女性会員が多く、生誕200年を祝う祭典として2年前には翻訳全集(全6巻+別巻2冊)を、そして、一昨年には論文集を出版した。現在は没150年を記念する企画を立案中である。

以下、大会内容の概要を記すことにする。

研究発表は福井工業大学専任講師の小田夕香理氏の『『書く女』について書く——エリザベス・ギaskellとシャーロット・ブロンテの場合』、そして、実践女子大学専任講師の志渡岡理恵氏の「ギaskellの雑誌・新聞記事における異国表象」の2つだった。いずれも女性作家が家父長社会においてどのように書くことで自己を表現したかを論じた発表で、総司会を担当された神戸大学教授の石塚裕子氏との洞察力に富んだ質疑応答は特筆に値すると思われる。「書く」という行為が男女の間で異なる意味をもつということを大前提とした研究が時代遅れになりつつあるような、新しい研究の萌芽を感じた。続くシンポジウムは「ギaskell文学と手紙」というテーマのもとに、聖徳大学準教授の宇田朋子氏、日本女子大学名誉教授の出淵敬子氏、中央大学教授の太田美和氏、専修大学非常勤講師の江澤美月氏が各自の論を交わされた。4氏は早朝から正午過ぎまで8階エレベーター前のラウンジに陣取り、打ち合わせに余念がなく、彼女たちの熱心さに脱帽し、圧倒された会員は多かったと思う。苦言を呈するなら、聴衆の多くが疲労困憊しないように発表時間を短縮し、

議論にもっと時間を割いた方が聞き手にシンポジウムの趣旨が分かり易かったと思われる。大会プログラムの最後を飾ったのは、東京女子大学教授の原英一氏による「ヴィクトリア朝のグリセルダと反グリセルダ」と題した講演だった。原氏は数年前に本学で大会を開催したディケンズ協会日本支部の会長であり、同時代にイギリスで活躍したディケンズ文学とギヤスケル文学とを英文学史の流れの中で比較検証し、当時の弱くて強い女性の特性を簡潔に分かり易く解説された。日本語訳も英語の朗読も素晴らしかった。講演後、同氏の講演が単行本として出版予定の論考の1部であると知らされ、日本では停滞（衰退？）気味の英文学研究にも希望が未だ失われていないことを確信した。

大会プログラム終了後の懇親会には想定外の参加者が数多く集い、アルコール飲料が大幅に不足したほどだった。また、規定時間を過ぎてもお喋りに花がさき、消灯は午後9時近かった。大会後

半年近くが過ぎ、雑談内容の大半が記憶にないが、斟酌した協会会員の1人が市村学長の昼食前のご挨拶に遅まきながら応え、「江戸川大学のためなら、何でもしますよ〜〜」と歌うように明言したことだけは今も脳裏に焼き付いている。学会活動では発表論文本数と論展開の斬新さが主要な評価基準となるが、本大会の運営委員長長の立場から言えば、この台詞が最大の褒め言葉に聞こえた。何か、あるいは、誰かのために無条件で貢献できる強靱な精神と実行力こそが不安定なグローバル社会を生きるうえで必要不可欠ではないかと考えた大会だった。

IT産業の世界的な隆盛に伴う活字文化の変容に戸惑うことが多い反面、個人の小さな声を拾い、文字の形で表現する文学は国境の境界線をかつてより容易に越え、世界中へ発信できるようになった。英語で世界へ発信できる学生を1人でも多く育成したいと切に願った大会でもあった。